

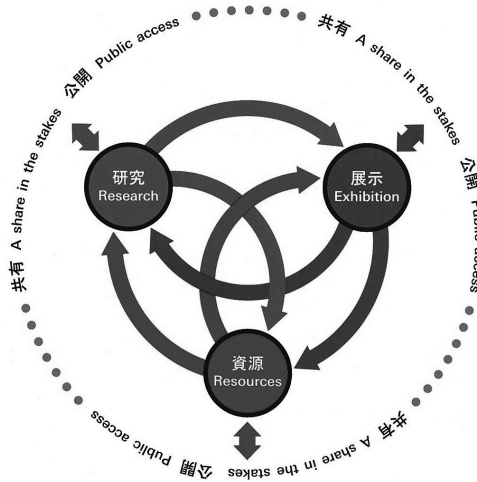
開館 30 周年記念論文集刊行の辞

国立歴史民俗博物館（歴博）が本年三月に開館 30 周年を迎えたことを記念して、ここに開館 30 周年記念論文集を刊行する運びになりましたことは、大変よろこばしいことです。

1981（昭和 56）年、歴博は国立大学共同利用機関（1989 年、大学共同利用機関と改称）として設置されました。設置当初から歴博は二つの大きな機能を有していました。一つは、21 世紀に向けて新たな日本の歴史と文化に関する総合的研究を推進するための有効な形態としての「博物館」であること、もう一つは、博物館を適切に運営するために、大学を中心とする全国の研究者と共同して調査研究・情報提供等を進める体制が制度的に確保された「大学共同利用機関」であることです。

2004（平成 16）年の法人化とともに、歴博は大学共同利用機関法人人間文化研究機構を構成する五つの研究機関の一つとなりました。この法人化にともない、機関としての存在意義を明確にすることが、より一層各方面から求められたのです。2007（平成 19）年、歴博の新たな理念と基本方針を次のように定めました。

設置当初の二つの機能—博物館と大学共同利用機関という形態—をあらためて立脚の原点と位置づけること。歴博の使命は、人類の歴史的営為が複雑に絡み合った現代社会において未来を切り拓く歴史的展望の獲得と、歴史認識を異にする人々の相互理解の実現に寄与することにあります。その上で博物館は、学術資料・情報の収集、整理、保存、調査研究そして提供という一連の機能を有することを最大の特色としています。そこで、博物館という形態を活かした新しい研究スタイル「博物館型研究統合」を提唱することにしました。「博物館型研究統合」とは、〈資源〉〈研究〉〈展示〉という三つの要素を有機的に連鎖させ、さらにそれらの要素を国内外の幅広い人々と〈共有・公開〉することによって、博物館という形態を最大限に活かした研究を推進することです。



あわせて「共同利用性の充実」を図ることにより、共同利用機関としての使命と社会との強固な接点を活かした研究が推進できるとしました。それは新しい展示概念の提唱でもあります。〈展示〉は研究成果の公開という〈研究〉の終着点ではなく、そこから再び〈研究〉や〈資源〉へ出発する起点にもなるのです。〈研究〉を〈展示〉に活かして発信するだけでなく、〈展示〉を通して学界や広く社会から受信して〈研究〉に活かせることが、大学や研究所などにはない博物館の優位性といえます。

もう一つの歴博の優位性は、資料と研究を結合することです。歴史資料・情報の収集、調査、保存という機能については、これまでも研究と一体となって遂行されてきており、すでに多くの成果も生み出しています。また、歴史資料・情報に基づく学際的・

実証的研究も、歴博独自の研究として高く評価されています。とくに、日本の歴史と文化に関する有形無形の多様な資料を、研究の課題や視点に応じて系統的かつ継続的に収集・保存する唯一の機関として、それらを中心に据えた学際的な資料研究は歴博独自の研究となるばかりか、新たな研究資源を創出し、日本の歴史と文化に関する研究の新しい地平を拓くものとなるのです。

さらに2011（平成23）年からの第Ⅱ期中期計画として、「海外の大学や博物館、研究所等と学術交流協定を結び、それに基づいた研究ネットワークを形成して、日本の歴史と文化に関する総合的研究を推進する」としています。

歴博は2010年の現代展示室（第6室）の開室によって、日本の歴史・文化を原始・古代から近・現代まで総合展示する国内唯一の機関となったのです。現代の日本社会は環境・災害・戦争・都市・生業・宗教・マイノリティー・生と死・経済と格差などの社会的・精神的な問題において、根源的崩壊さえ招きかねない現状に立ち至っています。大学共同利用機関としての歴博の共同研究は大きくは基幹研究と基盤研究です。歴博の基幹研究は現代的視点と世界史的視野に立って上記の課題に取り組み、総合展示にもその成果を常に反映してゆく必要があります。

また、日本の歴史・文化の実態を解明するためには、人文・社会科学と自然科学の協業体制をより一層充実させ、新たな歴史・文化の研究資源化に向けて、歴博における基盤研究の充実に努めることも重要です。

自立的な研究機関として、自由な発想による個人研究が活発に行われるべきであることはいうまでもありませんが、それらを共同研究に結びつけることができれば、大学共同利用機関としての共同研究をより一層強力に推進することができると考えられます。

開館以降、国内外の研究者を結集した共同研究および個人研究の研究成果については、『国立歴史民俗博物館研究報告』として刊行し、国内外の研究機関および研究者に幅広く活用され、学界に少なからず影響を及ぼすことができたのではないかと思います。歴博の研究報告書は、2013（平成25）年3月までで177冊刊行しました。30年で平均、年ほぼ6冊というペースで刊行したことになります。学術研究機関としての歴博の研究成果が上記のように刊行されるのは、当然のことともいえるのですが。

井上光貞初代館長は「国立歴史民俗博物館開館に当たって」（『文化庁月報』1983（昭和58）年2月号）と題した“開館の辞”において、次のようなメッセージで結んでおられます。

今仮に歴博の求める歴史学研究者（狭義）の理想像をいえば、歴史のすぐれた研究者であるとともに、書誌学や古文書学の深い造詣をもつものである。歴博に将来育って欲しい理想的な研究者像は歴史部門（狭義）に則していえばかようなものである。私は歴史学の研究者であるから、それを例にとったが、同じことは考古学でも民俗学でもいえることであろう。そのような人間像を設定するとき、人によって得手・不得手はあっても、博物館活動と研究と、矛盾なく両立し得るとおもうのである。そのような“歴博人”は必ず、将来の広義の歴史学の開拓者となるだろう。

私は館長就任以来、館員に対して、歴博らしさを発揮した研究すなわち“博物館機能を存分に発揮した独自の研究スタイル「博物館型研究統合」の実践”を求めてきました。この実践者こそ井上先生の望まれた“歴博人”なのです。

この30周年記念号を含め、歴博の研究に対する学術的評価・社会的意義等につきましては、学界はもちろん、幅広い分野の人々に委ねたいと思います。

ここにこの論文集が歴博開館30周年を記念し、将来に向けてのさらなる決意の一端を示すものとして刊行し、関係各位の一層のご理解とご協力を心よりお願い申し上げます。

2013（平成25）年3月

国立歴史民俗博物館長

平 川 南